

# ジャパンアートマイル 10周年記念フォーラム報告

ジャパンアートマイル (JAM)

ジャパンアートマイルを発足して10年となる今年、10周年を記念して「ジャパンアートマイル10周年記念フォーラム」を国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）で開催した。

フォーラムでは、前半に10年の歩みと成果をアートマイルの参加者の発表で振り返り、後半に文部科学省・外務省・JICA・企業からパネリストを招いて「世界の人々と協働して未来を創造する」をテーマに議論した。フォーラムには教師・大学・NPO団体・企業など様々な職種から多くの参加があり、私たちはどういう未来図を描いてこれからを生きていったらいいのかについて参加者一人一人が考える会となった。

## 1. 10周年記念フォーラム

ジャパンアートマイルは、2005年に、「自分の国の伝統・文化に誇りを持ち、グローバルな視野をもって世界の人々と相互理解を深め、平和な世界の実現をめざす」という理念でスタートした。

今年、発足10周年を記念して、「世界の人々と協働して未来を創造する」というテーマで公開フォーラムを開催した。

【日時】2015年10月24日(土) 13:30~16:30

【会場】国立オリンピック記念青少年総合センター

【主催】ジャパンアートマイル実行委員会

【後援】文部科学省、外務省



## 2. アートマイルの10年の歩みと成果

前半は、アートマイルの10年の歩みと成果をJAM代表とアートマイル参加者の発表で振り返った。

### (1) 「アートマイルの10年の歩み」



ジャパンアートマイル代表の塩飽隆子が国際協働学習を教育の現場で推進することを活動の柱としながら、国内外で展示・イベントなど様々な活動を行ってきた10年を振り返った。



### <アートマイル国際協働学習>

アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクトは、2006年に3カ国・地域から約1,121名の児童生徒が参加してスタートし、2012年からは毎年30カ国・地域から約5,000名が参加するグローバルプロジェクトへと成長した。

この間、2007年に第7回インターネット活用教育実践コンクール（文部科学省主催）で朝日新聞社賞を、2008年にニューヨークの国連本部で Earth Day Award を受賞した。

2014年に日本で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」でアートマイルの発表と展示を行った。これがユネスコに評価され、2015年度はユネスコパイロット事業「IIME:an Experimental Phase with UNESCO ASPnet Schools」がスタートしている。

#### <国内活動>

2007年と2008年にユネスコ世界文化遺産である姫路城で平和のメッセージを込めた壁画を制作する市民参加のイベント「でっかく！壁画プロジェクト」を開催。2007年に500名が参加して28枚の壁画を完成、2008年に300名が参加して26枚の壁画を完成させた。

2011年には東日本大震災の復興を応援する「絆プロジェクト」をJICA中部と共催し、名古屋の中学校8校と仙台の中学校3校が5枚の連作壁画を共同制作した。

#### <海外活動>

2010年に韓国で開催された「ユネスコ第2回芸術教育世界会議」で国際理解教育としてのアートマイルの成果と意義を発表した。同年にエジプトで開催された「平和の祭典 MURAMID 展」では日本から8名のユースを派遣し、世界で唯一の被爆国日本から世界に向けて「非核平和宣言」を発信した。2012年にはインドネシアの環境NGOと共催で「アートマイル環太平洋環境ユースサミット」を開催した。

#### <展示活動>

国内では、美術館・JICA施設・学会会場等

で毎年作品を展示した。主な展示は、2009年の兵庫県立美術館36点展示、2011年の金沢21世紀美術館70点展示である。

海外では、アメリカ・イタリア・インドネシア・エジプト・オランダ・カナダ・韓国・台湾・モロッコで展示した。

#### (2)「世界と繋がった教師と子どもたち」



香川県観音寺市立観音寺小学校の木谷厚子教諭は、2009年度よりアートマイルに参加して、世界に開く広い視野を持つ子どもの育成に取り組んできた。その実践と成果を発表した。



#### <要旨>

未知の世界との出会いにワクワクする仕掛け、相手がいる実感が持てる仕掛け、伝えたい思いを形にする仕掛けなど、子どもの心が次々と動く仕掛けを作り、子どもたちに様々な違いを超えて世界の他者と関わり合う楽しさを味わわせることで、自分を見つめ、地域や国を愛する子どもを育てる国際協働学習を実践した。

昨年度は若手教師にアートマイルに参加させて、広い視野で捉え総合的に考えられる教員、グローバル社会の形成者としてのスキルを身に付けた教員、信頼に支えられた協同の学びの場を作り出せる教員の育成を試みた。その結果、コミュニケーション力・人間関係力・情報活用能力が高まった。

### (3)「世界に飛び出した高校生」



兵庫県立芦屋国際中等教育学校6年生の田中宏果さんは中学3年生の時に学校でアートマイルに参加し、JAM主催の「アートマイル環太平洋環境ユースサ

ミット」に参加したことで、将来の夢に向かって具体的にアクションをとるようになり、昨年夏から1年間フランスの高校に留学した。この3年間の心の変化とこれからについて語った。



#### <要旨>

ユースサミットに参加したことで世界に貢献する仕事がしたい、国連開発計画で働きたいと思うようになった。国連の公用語であるフランス語を学ぶためにフランスに留学した。留学は外から客観的に自分を見つめる機会となり、どこで何をしても自分にはできないことがあることが自分という唯一の存在をつくることになると気づいた。大学は欧米ではなくマレーシアの大学に行くことを考えている。

人と違うことに挑戦することが自分にしかできないことを見つけることに繋がると思うからだ。国連に入ったら開発の分野で現地の人と技術者を繋ぐ仕事がしたい。そして、国連での経験を元に国際開発事業を立ち上げたい。

### 3. パネルディスカッション

各分野でグローバルに活躍しているパネリストが、これから私たちはどういう世界を生きていくのか、世界の人々と一緒にどんな未来を創っていったらいいのかについて論じた。

#### <テーマ>

「世界の人々と協働して未来を創造する」

#### <パネリスト>

- 鈴木 寛 (文部科学大臣補佐官)
- 三上 正裕 (外務省大臣官房参事官)
- 田中 雅彦 (独立行政法人国際協力機構広報室長・JICA 地球ひろば所長)
- 大久保 昇 (株式会社内田洋行代表取締役社長)
- ※コーディネーター
- 稲垣 忠 (東北学院大学准教授)

ディスカッションはパネリストが次の3つの質問に答える形で進められた。

- ①これまで世界とどのように関わってきたか
- ②未来の世界(2030年頃)はどうか
- ③私に何ができるか



<パネリストの発表要旨>



鈴木 寛  
文部科学大臣補佐官



三上 正裕  
外務省大臣官房参事官



OECD（経済協力開発機構）の Education 2030 に関わっている立場から言うと、2030 年頃は多くの仕事が人工知能に置き換わっているだろう。その時に人工知能では代替できない仕事、人間にしかできない仕事は何か？ OECD ではそれを「Collaborative problem solve 協働して問題を解決する力」であり、「Global Competency 違った文化の人達と協働する力」と言っている。

自分はこの人間にしかできない仕事を「Creative Collaborative Art Work」と呼んでいる。これから未来に人間に必要とされる力は、無から有を生む「Creation」、違うバックグラウンド、違う才能を持った人達が協働して一つの形を作る「Collaboration」であり、唯一無二の存在同士が会って一期一会の事を成し遂げる「Art Work」である。これからは Creative Collaborative Art Worker を育てなければならない。

東西冷戦崩壊直後アメリカ主導で自由民主主義が広がれば安定すると思われたが、25 年経ってみるとアメリカの力は低下し、世界は多極化と混乱の時代となっている。自由民主主義 + 市場経済が壁にぶちあたり、テロが多発する不安定な社会では、軍事力のようなハードパワーだけでは問題を解決できない。

これからの世界の問題解決には国家としての魅力「ソフトパワー」が重要だ。日本はソフトパワー（伝統、文化、食、科学、サービス等）が非常に優れており、その力で世界の安定に貢献ができるはず。ただし、世界を見ずに自己満足して傲慢になってはいけない。外を見て世界に学ぶ姿勢を持ち、日本を相対化して客観的に見るのが大切だ。



田中 雅彦  
独立行政法人国際協力機構広報室長  
JICA 地球ひろば所長



私たち日本人の生活は途上国の産業の上で成り立っていることに目を向ける必要がある。2030年頃は絶対的貧困は減少するだろう。しかし国は発展しても格差は拡大するだろう。格差問題の解決は今後も重要な課題だ。

これから必要なグローバル人材は、多文化適応力+コミュニケーション力+問題解決力を持つ人である。日本人は「知」と「経験」を海外に輸出して、その国の人々と「Co-creation（共創）」して問題解決するのがいい。一方、グローバル化とは外へ出て行くだけでなく、日本の中に移民・難民を受け入れることでもある。一国平和主義から脱却して、移民・難民を受け入れ、グローバルな国になるべきである。



大久保 昇  
株式会社内田洋行代  
表取締役社長

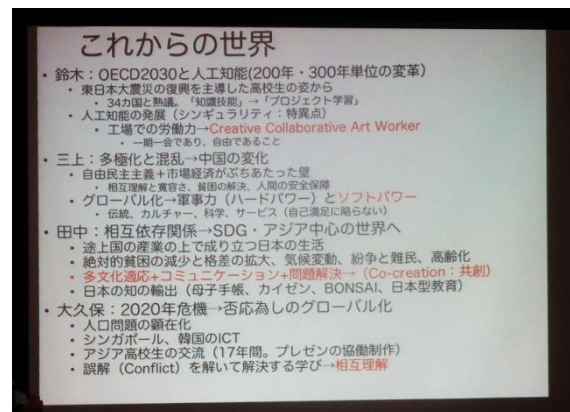


16年前に初めて海外視察をしたときに、海外のIT教育がいかに進んでいて日本がいかに遅れているかに驚いた。そのとき、世界から学ぶことが多かったが、それ以上に日本を客観的に知ることができた。

これからの日本を考えると「2020年危機：人口問題の顕在化、少子高齢化」が目前だ。日本にいても世界にいてもグローバル化の波は来る。もう日本がグローバル化し、世界を受け入れて多国籍化するしかない。日本の特性を活かして他国とどう組み合わせるかを考えるべきである。違う者同士が協働しようとする「Conflict（衝突）」があつて当たり前。Conflictを解いて相互理解を深め、問題を解決していくことが重要である。



稲垣 忠  
東北学院大学准教授



コーディネーターとして、3つの質問によりフィールドが異なる4名のパネリストから異なる視点の意見を引き出して重層的に議論を深め、的確なまとめを示した。

参加者一人一人がこれからの世界をどう生きていけばいいのかを考え、ヒントがもらえるディスカッションに導いた。

#### 4. 参加者の反応



・予想を超える内容で感激した！とにかくすごい会だった！

・木谷先生の実践も田中さんの今後の生き方に対する宣言も心を打たれた。パネルディスカッションは、文科省・外務省・JICA・実業界と普段はあり得ない取り合わせのパネラーが未来を語るという内容はすごかった。

・期待以上に面白かった。スケジュールをやりくりして出席して良かった。

・内容的にはどれも傾聴すべき意見ばかりだった。アートマイルで日本人として参加した子供たちが、将来は国と国との間のコーディネーターになっていくという夢が描けたらと思った。

・アートマイルの力を実感し、今後の可能性を感じた一日だった。

・現場で実際に取り組みをされている先生方は、アートマイルを通し経験された教え子さんたちの表情や言葉、行動から物凄い手ごたえを感じていた。これは凄いことだ。

・つい目の前のことばかりに気を取られているが、今日の話聞いて広く世界のことに目を向けることを忘れてはいけないし、2100年に自分の子どもが生きていると考えたらもっと遠くを見ないといけないと思った。

#### 5. これからに向けて

今後ますますグローバル化が進む中で、世界の人々と協働して未来を創造する次世代の育成はもはや時間に猶予がない課題である。

フォーラムでの数々の示唆に富んだ意見を参考に、ジャパンアートマイルが10年間で蓄積したことを活かし、グローバルなネットワークを拡張、未来の世界の持続可能な発展と平和のためにこれからも新たな挑戦を続けたい。